新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会

〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男方　TEL 0258－32－0428

国体「踏査競技」のこと

成年女子選手　植木美幸

初顔合せの時だったと思う。「紫雲寺」の帰り、喫茶店で監督から国体のオリエンテーションがあった。その時、「これ、私が出た時に作った地図」と見せられたのが手製の踏査地図であった。全身から血が引くのが分った。

踏査競技のトレーニングは、まず手製の地図作りから始まった。大会本部の指示した踏査コースを地形図に従って歩き、地形図とは別の、チーム用オリジナル地図を作成するのである。山中には、町名、番地の表示も「表札」もない。だから、その代わりになる目印を決めて名付け、目印から目印までの距離を計る。距離を計るのは「コロコロ」と呼ばれる素朴極まる計測器であり、目印は山中のこととて、主に樹木や岩石ということになる。例えば、右にカーブした地点につる性の木が巻きついた杉の大木があったとすると、それが「右カーブつる木」という「表札」になり、又、沢になった地点に二つ並んだ小岩があったとすると、それが「双子岩沢」となる次第。目印から目印まで百メートルは離れない方が望ましいから大変。幾つもの目印を決め、そのうえただの木や岩でしかない目印に、固有の名を付けようというのだから大変も当然なのだ。松ばかりの峠で、「倒れ松」「石松」「開け松」と名付けた苦労等はほとんど笑えた。手間、暇かけて地図ができあがると、今度はその地図を片手にコースになる山林を歩いて目印を覚える。地図は作っても、一、二度通っただけでは忘れるし、先を急げば見落す。「三度通れば普通覚える」と監督は言うのだが、普通でない場合もあって、幾度通ったことか。仕上げは、手製地図と目印の位置を書き込んだ地形図との二種類の地図を持って、規定重量の荷を背負いできるだけ早くコースを回る。その練習を繰返す。他県のことは分らない。以上が新潟県チームの踏査競技の練習方法だった。

北信越大会はよかった。現地に日参できる地元の強みで、スタート5分前にコース地図を見せられた瞬間に、スタートからゴールまでの全行程を頭の中に思い浮かべることができた。定点位置を確実に地図に記しながら山林を駆け抜けるのは、大雨の中でさえも何と愉快なことだったろう。結果は満点で一位。

四国本大会ではそうはいかなかった。コースはエリアの指定しかされていない。道探しから始めなければならなかった。他県から情報を収集し、限られた時間をひたすら歩き、何とか手製地図は出来上がった。生活道と巡礼道と林道の錯走する難コースを、普通の人なら覚えられる三回は歩くこともできた。第三チェックポイント到着を確信し、ペーパーテストの模擬もやった。当日、スタート地点の阿波池田町、丸山公園の空は青く澄み渡っていた。しかし、メンバー全員国体初出場チームに仕掛けられた「罠」は、スタート後30分も経たない地点にあった。一時は、各県チームが団子状態だった林道が、気付くとシンと静まり人っ子一人いなくなっている。読図で見当をつけた谷へ下りる脇道は、その途中で、行く先に立てられた×印の看板が見え

理事会 評議員会案内

平成6年4月10日（日）
新潟市万代コミュニティセンターにて開催
理事会　10時より
評議員会　13時より

た。近辺の道という道に入り込み、そのたびに×印に会い、焦り、うろたえ、三人して途方に暮れた。レースの最後部を守る役員団が林道の一角に陣取り、新潟チームの右往左往を実に辛抱強く、遠々と眺めていた。冗談ではなく「ここで時間切れだったりして…」と思った。が、よくしたもので、予測可能な最悪の事態というのはめったに起らないとみえて、道は見つかった。最初見当を付けた脇道を下り、途中で×印の看板を見つけても、すぐに引き返さずに、ジッと堪えてもう少しだけ下ると、×印の看板の手前で右折する道を見つけることができたのだった。何という時間の浪費、何という体力の消耗、と口惜しがってみても、要するに読図力が未熟だったのだし、よけいな体力を消耗し、その程度の消耗で余力を擦り減らす、非力なチームだったのだ。分かる道は全力で走りもしたが手遅れだった。第一チェックポイント通過後タイムオーバー。第二チェックポイントで待機を命じられ、自衛隊のジープに収容されて丸山公園に戻った。踏査競技の順位は、15チーム中11位。選手時代、他県に「踏査の新潟」と言わしめた監督は、怒鳴りも嘆きもしなかった。第一チェックポイントまでの三ケ所の「定点」点が生きて、時間切れ5チーム中トップだったことを喜んでくれた。ただ、ただ感謝。

柏エスキー山岳部

訪中登山隊　青海を行く(終)

星野　正志

●中国「絶不調」体験記

夏休みといえば、高校野球を見ながら、アイスを片手に家でゴロゴロするのがお決まりだった。しかし、今年は20日間も中国旅行に行くことになった。気の小さい僕は、バテるのではないか、へたをすると遭難するのではないかと心配ばかりしていた。

今回登山を行った青海南山は、富士山より700メートルくらい高い。ベースキャンプは標高3400メートル、アタックキャンプは3900メートル。酸素が薄くなると、頭痛、腹痛などの高度障害が出てくる。それが3500メートルを超えた辺りからだ。事前の体調管理はしっかりしたつもりだったが、4日間、中国食を食べ、つい大食になる自分のペースがつかめず、体調は良くなかった。

○　○　○

登山行動1日目。ホテルから中国の高校生とバスで高度順応のため日月山（3520メートル）に立ち寄り、ベースキャンプを目指す。この日、バスの中で鼻血は出るわ、車に酔うわで、体ボロボロの最悪の状態だった。

2日目。朝から吐き気、頭痛、腹痛の超最悪の状況だった。どしゃ降りの雨で停滞と決まるや、シュラフに入ってもうひと眠りした。午後からは天気も良くなり、お腹を気遣いながら騒いだ。

登頂の4日目は、小雨まじりの曇り空。朝から手足がしびれ、死ぬのでは、と思いながら目覚めた。医者の祁（キー）先生にみてもらうと、「ダイジョウブ、ケンコウソノモノデス」と言われた。しかし、手足のしびれは止まないし、信じていいものやら。

アタックキャンプを出発。朝食を食べて、だんだん調子が出てきた。すると、前夜夕食を食べなかったことが不調の原因と思えてきた。山頂からは青海湖が見えるはずだったが、ガスで眺望がきかない。がっかりしながら下っていると、ガスが晴れ、眼下に湖が広がった。その時、僕は思わず感動して拝んでしまった。

○　○　○

今回の旅で日本人以外の人と接し、いろいろと勉強になった。「センエン、センエン」と言いながら、水たばこを売っていたお父さん。美人だが、言っていることが今いち分からなかった西安のガイドの曲さん。僕を青海省に残すと、いつもニコニコ張り切っていた登山協会副会長の鄧さん。目を閉じると中国で出会った人々の顔が浮かぶ。でも、やはり思い出すのは、別れの時、駅の見送りで泣き崩れた中国高校生の顔。これは一生忘れられないものになった。

こういう体験は、今までの平凡な夏休みと違った思い出になり、人間もひとまわり大きくするように思う。ちなみに僕は4キロもやせ、ひとまわり小さくなってしまった。

（柏崎日報より転載）

【地元の山紹介】

山毛欅平山（ぶながだいらやま）

佐渡山岳会　関　雅志

私どもでは、毎年紅葉の時期に島民登山会を実施しております。平成5年は10月17日の日曜日、久しぶりに山毛欅平山に行きました。この山は標高945mで佐渡では高峰の部類に入りますが、地理的に島の北部に寄っているせいか、一般にはあまり知られていない山です。ややもすると島外の識者達に「三角点のある山」として知られ、話題にのる事の方が多い位です。つい先頃にも新潟日報紙上、平

田大六さんの連載で紹介されておりました。

佐渡の緯度を越後のそれに当てはめると、北は岩船郡の朝日村付近、南は角田山までの間に分布しており、38度線を挟んで南北に広がっております。そしてこの山毛欅平は村上に比定されます。

この北方の山に行くには、まず両津から車で加茂線沿いに幾つもの小さな集落をどん・どん北上し、北五十里、白瀬、馬首、北松が崎、平松、浦川、そして歌見に入り、ここが登り口となります。歌見川の橋を手前で左折し、しばらく林道を遡り、砂防ダムを越えた終点が出発点です。

近年、林道工事が進み、車道はかなり上まで伸びております。標高にして300m余はこれで稼げます。終点で辺りを慎重に見渡し、左側の切り通しの斜面の向こうに道らしきものが見え、それが山毛欅平に続く登山道となっております。（平成5年10月現在、観察するところ、車が10台程度駐車できるスペースの確保からしてここで工事も完了ではないかと思われます）

今回の参加者は28名、親に背負われた幼児から、血気盛んな熟年まで。天候は少し厚めの曇り空、途中一雨は必死の案配に準備を換起しながら点呼をとる。今日は我々の他に同じコースで別行動を取る、羽茂町公民館の親子登山会45名が後に続き、9時丁度出発する。

登り始めから、もう急勾配の道になる。30分も歩いた栗の木林になっている辺りで空が急に暗くなり雨が降って来る。しかしこの林のおかげで雨は音だけで済む。途中小休止を入れて進む。上空で雲が大きく流れている。尾根道の風が思いやられて来る。どうも今年の紅葉はこういらを見る限り、あまり望めそうもない。黄色と茶色が目だち、赤が極端に少ない。あっても一本ポッツンと程度、枯れ落ちているものも多い。

水場で昼食用を確保し、また進むと、左右の木が山葡萄に変わっていた。実を取り食べながらの行動となる。ツルに跳んだり、たぐったり忙しい。突然尾根に出るとそこに車道があった。「こんなのなかったよ」に先月下見に来た者が「新大演習林の作業道で大倉・黒姫に通じている」との由。しかし道は林道にでるとすぐ10m程でまた左の山の中に入る極めて判りずらい選択をする。後ろに続く羽茂グループの為にテープで車道をトウセンボして目印とする。ここは海から直接くる西風が吹き荒れていた。

また藪の中に入り、風のない中を葡萄を捜して歩く。頂上まではもう近いはず。やや急勾配になった紅葉の木や杉の中を進み、芝生の道を歩くこと15分ほどで熊笹に囲まれた山毛欅平の頂上に着く。おおよそピークらしからぬ頂上で、なんとなくここが一番高いかと確認しなければならないような傾斜です。それでも若干の芝生と三角点の標識があり間違いはなさそうだ。以前来たときにあった、測量用とおぼしきコンクリート製の塊が破壊され、辺りに散らばっている、11時30分ここを頂上と認定し到着。

直接くる風にこんな所に長居は無用と、周囲を見回し少し進んだ藪の中に場所を見つけ早速荷物を下ろし昼食の用意をする。もちろんビールで乾杯し、ワイン、清酒と続く。そして我が山岳会名物のカボチャ豚汁の準備を始める。適当な枝を捜し三脚と自在鈎を作る人。野菜を片っ端から刻む人。濡れた枝を集めて火を起こす人。そして何もしないでただ邪魔をする人。皆それぞれなれていてプロ、こんな作業は早い。そのうち待ちきれず開いたそこここの弁当からのおすそわけの輪ができる。こんな時が女性の多い山行の最も喜びとする所です。

火があって、食い物があれば当面満足。そのうちグラグラ煮えた豚汁ができる。人数の割に量が多いとの判断で今日は薄味仕立て、お代わり自由で食事を開始する。後の予定は折り返して帰るだけ。しかし羽茂勢はここは通過点で大倉シラバ経由で北松が崎へのコース。昼食は小1時間で切上げ出発する。元気にご苦労さんと挨拶し別れる。この尾根を大倉越まで1時間ほど林の中を行けばです。

丁寧に昼食会をすること2時間。腰を揚げ帰り支度をする。用意が出来ると頂上に集まり記念写真をとり、14時丁度出発する。紅葉は頂上付近でもやはり望んだ程ではなく、所々鮮やかな赤がある程度の風景をカメラに記憶させ下山しました。そして15時50分登山口着。

このコースは頂上付近の作業道とぶつかる所さえ注意すれば一本道で不安の少ないルートです。何時かこの三角点の山を登ってみませんか。

新規加盟団体

南魚山岳の会
会長　星野重治
〒949-64
南魚沼郡塩沢町塩沢
1118ノ4
☎0257(82)1384
会員　19名

わがクラブ ⑥

我会、むささび会

我会は、創立36年になろうとしているのに現在のところ自慢できる実績はなく原稿を依頼されましてもちゅうちょします。

15周年には、管名岳の踏査登山、新潟県の一等三角点の調査登山を無我夢中で行ない記録を残しましたが、その後・の日本平の踏査登山では、まだ途中で恥しい限りです。

我会のモットーは、藤島玄さんのように、藪も道なり、沢も道なりとして行動をしております。会員は、一人一人「友情」を大切にするという大きな柱の上に成り立っています。

この友情がこのたびの私の病に痛い程励みを与えてくれました。健康が取り柄と仕事に家事におわれながらも、土曜、日曜となると、毎週のように山をかけずり歩いていた私が突然倒れ命拾いをしました。そのとき会員の皆様の愛にどれほど支えられたことでしょう。手術後一ケ月の面会謝絶が続く中、心配をしていただき、廊下でドアの開く一瞬でも一目見よう。また、花束をそっと置いてくれたり、寒いからとチョッキを編んでくださったり、常にぬくもりが伝わり嬉しく感謝していました。あげくのはて私が回復するまで登山を断つ方までおられ閉口しました。また、色々の事情で会を去った方も何十年の再会を病室ではたせた幸せ。

術後2週間が過ぎても回復のきざしが見えず、体には、ものものしい器具と管がまきつき涙を流す日々を友の愛が生きる活力を与えてくれ、希望へとつながってゆきました。

3ケ月も入院していましたが、花の絶えることは1日となく、幸せなオアシスにおりました。私だけではなく夫の食事の差し入れまである心配りの優しさであります。

従って、我会の自慢は、なにものにもかえがたい「友情」であります。

この仲間意識があるからこそ、県山協の役員になっても苦労なく、役員を全うできる秘訣がここにあります。婦人部をさせていただいたときもにぎやかでしたように、現在の中高年の行事も多くの参加者がいても委員長の許で、私がオロオロしないことは、この陰の優秀なる友の力があるからであります。

新年になると年間行事が発表され、月2回行事があります。1回は、新人向けに行ないます。行事がないときのみ個人山行となります。とにかく1回山行に参加してもらえたら、もう何十年来の友に早変りするから不思議な会です。なに程の指導もないが、ただ大丈夫だろうという考えだけは厳しく教えられます。山は楽しくをモットーにしているから楽しさから学びとってゆくのでしょう。互いに持ちよる友のためのささやかな1品のおつまみが、堅い絆へといつしか培われて、気がつくと優しい連の中の大狼に育っているから心強い会であります。

（加藤　記代子）

理事会報告

五十嵐　昇

平成6年1月23日（日）

会場　新潟市イタリア軒

出席者、室賀会長以下27名

出席、会長挨拶の後、以下の議題について質疑応答がありました。

1. 本年度協会行事運営について各委員会より報告

協会の専門委員事業実施計画を変更するもの――遭難救助講習会を春山講習会に名称変更し3月12～13日にかけて下田村粟ケ岳を会場として実施する。

その他は年度当初計画通り。

2. 新規加盟団体の承認を得る件

南魚山岳の会（なんぎょさんがくのかい）の加盟を了承した。

3. その他

何も無し。

4. 事務局より

①協会予算の執行状況について

②分担金の納入状況について

過年度未納5団体。5年度未納19団体の報告。

5. 次期の評議委員会、理事・専門委員会について

①次回の理事・専門委員会は平成6年3月12日（土）14時～17時、下田村八木前の教育センターで行う。

②評議委員会及び理事会

平成6年4月10日（日）

理事会は10時～12時

評議委員会は13時～17時

新潟市万代コミュニティセンターで行う。

おくやみ

高田ハイキングクラブの中江弘哉氏（39）が、去る2月27日糸魚川市の鉢山にて、雪崩に巻き込まれ死亡されました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。